

現場主義

～カンボジアから地域の活動に

東 宏乃
東村山地球市民クラブ・理事、日本語委員会

「フィールド（現場）が性に合っている」と、
「フィールドワークから問題を見つけ、そこから現場の発想で新たな考え方を打ち立て、いままでの社会を違っ
た角度から捉え直すのが大事だと思っている。」のだという。環境科学や地域研究でつちかっただフィールドワーク
の感覚（視座）を、生物の教員からカンボジアでのNGO活動へと広げ、そして今は、自分の足元＝日本の地域を
現場とする。

2000年、2001年と、狭山青年の家の国際理解推進事業の企画運営委員として参加。



▶カンボジアから日本の地域へ

カンボジアでは、最初、難民支援に関わり、2回目の駐在
では、農村開発にたずさわりました。NGOの支援で村人が
掘った井戸が、実際の生活の中でどう使われ、その水質は
どうか、普及員の役目もする村の若い女性たちと一緒にフ
ォローアップ調査をしたんです。一言でいうと、カンボジ
アでの経験を通じて、NGOの開発協力で大事なものは、緊急
救援よりはむしろ、お互いに育つていく姿勢だと思ってい
ていました。

カンボジアは内戦で社会が壊され、あらゆる分野の人材
も失いました。物質的にも豊かではありません。しかし、
将来を見ずえると、今の日本よりもカンボジアの方が生き
る力はあるのではないかと考えます。

大なる自然を背景とし、笑い、悩み、人間臭く文化的
に暮す。アジア全体がもつ可能性というものを感ずます。
その可能性というのは、偏差値やGNPとはまったく無縁の

▶入り口のハードルは低く 入ってから深い狭山の事業

さて、2年連続して企画とファシリテーターをやってみて、
狭山の事業は、日本人の参加者にとってもいい事業だ
と感じました。

国際交流という点、すぐに語学の壁が持ち出されますが、
その壁がなくなつた、という参加者が多く、何よりです。

また、狭山の事業に参加されている外国人は、アジア・
アフリカ、中南米など、いろいろな国や地域から来日して
いるJICA（国際協力事業団）の研修生ですが、彼らはそも
そも、マルチカルチャリズムの視点をもっているんです
ね。日本人の若者が、出合いに心躍らせ、単純で失礼な質
問をしても、どんどん投げ返してくれます。それが非常に
いい。だから最後は、ことばや肌の色、文化や宗教が違う
ことなどを乗り越えて、「（同じ）人と人なんだ」というつ
ながりがもてるんだと思うんですよね。ですから、とても
深い余韻が残る事業です。二泊三日のプログラムが成功し
たということではなく、参加者にとつては何かの出发点
になる体験だと思います。活動はひたすら参加型で、あん
まり勉強しないんです。その代わり、プログラムの最後は、
ふりかえりの時間を大事にします。

その体験をベースに、将来自分の周辺で何かをつかんで
いくためのセンス（方向感覚）だとか、自分が変われると
いう勇氣、その時のこんな感じでききあえばいいんだとい
う、腑に落ちるというか、身体で納得する感覚、ある種の
確信の芽みたいなのができるんだと思います。

与えてもらうことに日本人の若者は慣れすぎていて、自
分を出ていかないでしよう。出ていくきっかけがこの狭山
の事業でしょうね。

▶志は高く、ゆるやかで楽しいつながりを

ゆるやかというか、しなやかな関係を大事にしなが
目指すものに関しては志を高く、そういう想いの人が15人
ぐらいコアメンバーになって、いろいろな分野と連携して
いきたい。

ひとつは、脱教育⇒地域共育です。総合学習のモデル校
に地球市民クラブが関わっています。外国人や駐在経験の
ある日本人スタッフが、小学校で授業をしています。最
終的には、学校を地域に開いていく、そのお手伝いをして
いきたい。



狭山青年の家のミニ・ワークショップ

もうひとつは、これまで「国際」というのがツンとお澄
ました活動とされていたとすると、ともに生きるとい
うことをテーマにして、いままでは無縁だと思っていたセク
ターともつながっていききたい。例えば、子ども・青少年、
食、環境、そして、障害者など。しかも、海外とも同じ問
題意識でつながって。

外国人と私たちの間に隔てがなくなるのであれば、日本
人と日本人の隔てがなくなること、その延長として視野
に入ってくるのだと思います。

テーマは共生と市民参加というか、1人1人の生活や1つの
地域にも、雑貨屋のように、いろいろな引き出しや奥行
き・陰影がある、それが今からの地域自立には大事ではな
いでしょうか。

外ばかりに眼をむけるのではなくて、地域に根ざした新
しい考え方や共生のパラダイムを、「大事にしたいものもの
とつです」と、社会変革のタネをいっしょに育てていくよ
うな身軽な感覚でつながっていきたいです。声高にいうの
ではなくて。

「土の人」になろうとカンボジアから地域の活動に転換し
ましたが、こんどは再び、東京からアジアへ、地球へと、
「風」になって紡いでいきたい。

アジアと日本とが、地域と地域とのつながりで出会う、
共存しあえるような世紀が間もなく来て欲しい。そのため
に働きます。